經濟論叢　第五卷　第五號（通卷第二十九號）　大正六年十一月發行

論說

海外發展ノ二意義

山本美越乃

（一）

國民ノ海外發展ナル語ニハ二種ノ意義アリ、一ハ主トシテ社會政策上ノ見地ヨリセルモノニシテ他ハ經濟政策上ノ見地ヨリセルモノ是レナリ、社會政策上ノ見地ヨリセルモノハ一國ノ人口問題ニ中心ヲ置キ、經濟政策上ノ見地ヨリセルモノハ其ノ國ノ產業問題ニ重キヲ置キテ此ノ語ヲ解セントス、前者ハ通常之ヲ國民ノ移住的發展ナル語ヲ以テ表示シ、後者ハ國民ノ通商的發展ナル語ニ依リテ代表セラル、然レドモ是等ノ兩者ハ其ノ間ニ毫モ交涉ヲ有セザルモノニ非ズ、一國ノ人口ノ多少ガ其ノ國ノ產業上ノ活動ニ密接ナル關係ヲ有スルガ如ク、國民ノ移住的發展モ亦其ノ通商

的發展ニ密接ナル關係ヲ有スルコトハ之ヲ否ム可カラズ、例ヘバ國內ニ於ケル人口ノ增加ハ諸種ノ他ノ事情ト相俟チテ國民ノ移住心ヲ刺戟シ、國民ノ移住ハ自ラ該地方ニ對スル通商關係ヲ進捗セシムルノ機會ヲ與フルト共ニ、又國內產業ノ發達ハ其ノ自然ノ結果トシテ對外通商ヲ旺ナラシメ、對外通商ノ發展ハ延テ國民ノ移住ヲ促スノ一因トナルコトハ各國ノ移住及通商ノ歷史ニ徵スルモ明カナリトス、然レドモ吾人ノ茲ニ論ゼントスル所ハ斯カル相互ノ關係問題ニ非ズシテ、寧ロ一國ノ社會政策上及經濟政策上ヨリ觀察セル海外發展ノ比較重要ノ度ニ關スル問題ナリトス。

從來國民ノ海外發展ノ必要ヲ主トシテ社會政策上ノ見地ヨリ高調スル論者等ハ、一般ニ近世各國ニ於ケル人口增加ノ趨勢ハ各國民ヲシテ外ニ向ヒテ發展スルノ必要ヲ生ゼシメタルモノナルコトヲ唱道ス、此ノ說ハ最後ノ結論トシテハ大體ニ於テ誤リナキガ如シト雖ドモ、然カモ尙ホ一般的ニ之ヲ是認スルニ當リテハ、其ノ所謂人口增加ノ意義ニ關シテ更ニ精密ナル攻究ヲ要スベキモノアリ。

抑モ一國ノ人口增加ハ諸種ノ方面ヨリ其ノ國ノ產業上ノ活動ヲ盛ナラシメ、產業上ノ活動ノ旺盛ハ更ニ多クノ人口ヲ支持スルコトヲ得セシムルニ至ルベシト雖ドモ、國土ノ面積及其ノ富源ノ開發ニハ自ラ一定ノ限度存シ、決シテ無限ニ之ヲ增加シ得ベキモノニ非ザルガ故ニ、或程度ニ達スル時ハ國民ノ一部ハ新タニ生活ノ本據ヲ人口比較的疎ニシテ然カモ未開ノ富源ヲ有セル他ノ地

方ニ索メントシ、茲ニ海外發展ノ端緒ヲ開クニ至ルハ蓋シ自然ノ勢ト言ハザル可カラズ、故ニ人口ノ增加夫レ自體ハ必ズシモ國民ノ海外發展ノ直接ノ原因ト稱ス可カラザルモ、其ノ增加ニ伴フ產業的活動ノ能否及面積富源等ノ制限ハ、終ニ止ムナク外ニ向ヒテ發展スルノ必要ヲ感ゼシムルニ至ルモノナルヲ以テ、少クトモ人口增加ノ見込無キカ若クハ減退ノ傾向アル國民ハ對外的發展ノ資格ヲ有セズト言フハ眞ナリ、(註)然レドモ此ノ理ヲ推シテ直チニ人口增加ノ傾向アル所ニ於テハ常ニ必ラズ國民ノ一部ヲ外ニ向ヒテ發展セシメ、以テ之ガ調節ヲ計ラザル可カラザルガ如クニ速斷スルハ誤レリ、何トナレバ唯漠然國內ニ於ケル人口ノ增加率ノミヲ見テ直チニ其ノ過剩ヲ速斷シ、之ガ救濟ノ一手段トシテ海外發展ノ必要ヲ唱道セントスルガ如キハ、極メテ散漫且杜撰ナル提論タルニ過ギザルヲ以テナリ。

(註) "Though over-population has not been a primary motive in colonization, yet the question of population is an important one, as a stationary or retrograding people cannot reasonably expect to spare sufficient energy for colonial enterprise and to meet successfully the constant drains on 'human material' which it is sure to impose."(1)

論者或ハ人口ノ增加ハ富ノ分配ヲ益々不平均ナラシメ、無職者・失職者・貧困者等ヲ增加セシメ、延テ社會上ニ於ケル諸種ノ病的現象ヲ誘發スルノ原因トナルヲ以テ、社會政策上ノ見地ヨリセバ之ガ救濟方法トシテ海外發展ヲ奬勵スルノ必要アリトナスモ、此ノ說ハ之ヲ實際ニ適用スルニ當リテハ頗ル考慮ヲ要スベキモノアリ、蓋シ一國ニ於ケル人口ノ過剩ナリヤ否ヤノ問題ハ、單

(1) P. S. Reinsch, Colonial Government, p. 33.

ニ人口增加率ノ多少ノミヲ以テハ之ヲ斷ズルコト能ハズシテ、一方ニ於テハ人口ノ增加率、他方ニ於テハ是等ノ增加シタル人口ニ對シテ其ノ開發ニ委ヌベキ富源ノ有無及國內ニ於ケル產業的活動ノ餘地如何等ヲ比較考察シテ、然ル後初メテ決セラルベキ問題ニシテ、假令人口ノ增加率ハ大ナリトスルモ國內ニ於ケル產業的活動ノ餘地尙ホ少ナカラザルカ又ハ未開ノ富源ノ殘存セル場合ニハ、必ラズシモ國民ノ海外移住ヲ奬勵セザル可カラザルノ要ナキノミナラズ、若シ斯カル奬勵策ニシテ一朝其ノ當ヲ失スル時ハ、國內ニ於テ必要缺ク可カラザル有用ナル勞力ヲモ往々之ヲ國外ニ逸出セシムルガ如キ危險アリ、之ヲ過去ニ於ケル各國民ノ海外移住ノ實跡ニ徵スルモ、普通ノ事情ノ下ニ在リテハ移住者ノ大多數ハ國民ノ精華トシテ勢力ノ最モ旺盛ナル中年者ニシテ、（註）るーめりんガ嘗テ海外ニ移住セル獨逸國民ニ就キテ調査シタル所ニ據ルモ、移住者ノ六割以上ハ十五歲乃至四十歲ノ壯年者タリ、[1] 是レ一時獨逸ニ於テモ海外移住ノ奬勵ニ對シテ有力ナル反對說ヲ生ゼシメタル所以ニシテ、獨逸國民ハ自ラ巨額ノ費用ヲ負擔シテ其ノ子弟ヲ敎養シツツ、今ヤ活動ノ時期ニ入ラントスル年齡ニ達スル時ハ相率テ海外ニ移住スルガ故ニ國民ハ彼等ノ勞力ヲ利用スルヲ得ズ、其ノ結果獨逸ハ他國ノ爲メニハ極メテ有用ナル勞力ヲ提供スルモ、自國ハ產業上ニモ亦國防上ニモ是等有用ノ勞力ヲ斷エズ失フノ危險アリトノ非難ヲ生ズルニ至リシハ故ナキニ非ザルナリ。[2]

(1) G. Rümelin, "Die Bevölkerungslehre" in Schönbergs Handbuch der politischen Oekonomie, 2. Aufl., Bd. II, S. 915.
(2) R. Mayo-Smith, Emigration and Immigration, pp. 27-29.

(註) 最近一九一六年度ニ於ケル米國ヘノ移住者ニ就キテ觀察スルモ十四歲乃至四十四歲ノ中年者最モ多キヲ占ム(左表參照)[1]

米國以外ノ他國ヘノ移住者モ亦之ニ據リテ其ノ一班ヲ推スコトヲ得ベシ。

移住民	男子數	女子數	十四歲以下ノ者	十四歲乃至四十四歲ノ者	四十五歲以上ノ者	合計 男	合計 女
英吉利人	一八、七二七	一七、四二一	五、六八三	二四、八三三	五、六三二	一、四一〇	一、九二一
南部伊太利人	二〇、五三一	一五、二六八	七、二四四	四、二七六	四、二七六	五八、八九二	五、〇九八
希臘人	二一、〇九三	五、八九九	一、九六〇	二、五八〇	二、五八〇	二、二四〇	二、二四〇
愛蘭人	一一、二五八	九、三七八	一、九二一	一、六四七五	一、六四七五	一、二二一	一、二二一
佛蘭西人	一一、六二四	七、八九四	三、七六〇	二、二四〇	二、二四〇	一、五六七	一、五六七
スカンディナビア人	一一、五三七	七、六四五	二、一七〇	一、五四五	一、五四五	一、二四〇	一、二四〇
墨其西哥人	八、七三一	八、四六六	五、四五九	九、九八八	一、七八一	九六五	九六五
希伯來人	九、二九一	五、〇一七	三、五三一	一〇、六一二	二、二二一	一、二四〇	一、二四〇
蘇格蘭人	六、七二一	六、七四四	一、七〇八	九、四八七	二、五六七	一、五四七	一、五四七
葡萄牙人	四、一九八	一、五六三	一、五六三	九、七〇二	一、三四〇	九四〇	一、〇四〇
獨逸人	八、〇一〇	五、一二六	二、三七五	七、七七五	一、四〇八	六、一五	五一一
西班牙人	六、一二九	五、四二六	一、四〇四	八、〇六九	六、一五	五一一	六一八
日本人	七、七六八	一、四八一	五〇四	七、六九九	五一一	四、四八〇	一、五五五
和蘭人	四、〇三三	四、六七八	一、四四五	四、四八〇	六一八	四、七四〇	一、五五五
芬蘭人	五、九四五	二、四九八	一、二四〇	四、七四〇	一、五五五	四、二二五	一、七七七
露西亞人	三、四七九	八〇一	七五四	一四八	一四九	一、九七七	五五二
支那人	四、〇五七	二七七	一四八	一四九			
	一、九六二						

大正四年度ニ於ケル我ガ移民ノ年齡ニ就キテ調査スルモ左ノ如シ。[2]

年齡別	五歲未滿 男	五歲未滿 女	二十歲未滿 男	二十歲未滿 女	三十歲未滿 男	三十歲未滿 女	四十歲未滿 男	四十歲未滿 女	四十歲以上 男	四十歲以上 女	合計 男	合計 女
移民取扱人ニ依ル者	一七	一六	九四	四九	九二九	九五	三五一	二五	三九	七	一、四一〇	一、九二一
移民取扱人ニ依ラザル者	九七	八五	一、六八三	一、五六三	一、一二九	一、二三〇	一、九二一	八六二	一、〇〇七	一〇〇	一、五六二	一〇、八五
合計	二一五		三、三八九	二、一二一	四、四四八	三、一二〇	三、三四六	二四、九五	一、〇四六	一〇、八五	五、八九三	一三、五四三
全數百ニ對スル比例	一・七二		二七・〇二		三五・四六						一〇〇	

(1) Report of the Commissioner General of Immigration for 1916, U. S. A., p. 20.

(2) 外務省調査ニ據ル

此ノ如ク海外移住者ハ何レノ國ニ於テモ國民ノ精華タル壯齡者其ノ多數ヲ占ムル所以ハ、苟クモ故國ヲ去リテ異鄉ニ發展セントスルガ如キ者ハ、相當ノ思慮ヲ有スルト共ニ進取的ノ氣象ニ富メル壯年者ニシテ始メテ其ノ目的ヲ達シ得ベシト雖ドモ、思慮未ダ熟セザルカ或ハ既ニ老境ニ近ヅケル者ハ斯カル元氣ニ乏シク、從テ海外發展ノ如キ大業ヲ成就スルニ缺クル所アルヲ以テナリ、然カモ此ノ特質上ノ差異ハ其ノ國ノ產業上ニモ亦同一ノ影響ヲ及ボスモノニシテ、卽チ一國ノ產業的活動ノ旺否ハ少壯有爲ノ勞力ノ多少ニ依リテ決セラルト言フモ不可ナシ、彼ノろーじゃーすガ "Voluntary emigration would naturally expatriate the cream of the working classes." ト謂ヘルハ、必ラズシモ誇張ノ言トシテ之ヲ斥ク可カラザルモノアリ、是レ吾人ガ先キニ移住奬勵策ノ實際上ノ適用ニ關シテハ、頗ル考慮ヲ要スベキモノアルコトヲ提言シタル所以ナリトス。

（二）

更ニ又從來一般ニ行ハレツツアル過剩人口ノ調節策トシテノ海外發展論ニ關シテモ、吾人ハ其ノ眞價ヲ疑ハザルヲ得ズ、嘗テ賃金基金說（Wages Fund Theory Lohnfondstheorie）ノ學者間ニ勢力ヲ得タル時代ニ在リテハ、一國ノ人口ニシテ減少スルカ然ラズンバ賃金トシテ支拂ハルベキ資金ノ總額ニシテ增加セザル限リハ賃金ハ增加ノ見込ナシトノ學說ノ結果トシテ、國民ノ海外發展ヲ人口調節ノ有力ナル一手段中ニ加ヘ頗ル重要視シタルコトナキニ非ズト雖ドモ、過去一世紀間ニ於ケル各國ノ實驗ハ果シテ其ノ眞理ヲ事實上ニ立證シ得タリヤ、（註一）論者往々國內ニ於ケル人口過剩ノ結果海外

發展ヲ企テタル一例トシテ愛蘭及獨逸ヲ擧グルモ、英國政府ガ嘗テ愛蘭人ノ海外移住ニ對シテ與ヘタル援助ハ、果シテ幾許ノ效果ヲ其ノ人口上ニ齎ラセシヤ、現今ト雖ドモ愛蘭人ハ自ラ進ンデ外ニ發展センコトニ努メツツアルモ、彼等ノ生活狀態ハ之ヲ過去ニ比シテ著シキ進歩ノ跡アルヲ發見スルコト能ハズ、又獨逸ニ於テモ若シ過剩人口ノ調節ヲ海外發展ノ主タル目的トセバ、何ガ故ニ海外移住者ノ多クガ人口ノ比較的疎ナルぼーせん・しゆれすうゐっぐ、ほるしゆたいん・はのーばー・うゐすとぶろいせん・ぼんめるん等ヨリ出デ、人口ノ比較的密ナルしゆれぢゐん・へすせんなすさう・らいんらんど・ざくせん・うゐすとふあーれん等ヨリ出ヅルコト少ナキカヲ說明スルコト能ハザルベシ。(註二)

(註一) まるほーろ及うゐっぐノ調査ニ據レバ過去六十年間ニ於ケル歐洲各國ノ人口增加ノ趨勢及之ニ對スル各國ヨリノ國外移住者ノ數ハ左ノ如シ。(1)

國名	自一八三一年至一九〇〇年六十年間人口增加概數	平均一ヶ年ノ增加數
合衆王國	一三、〇〇〇、〇〇〇	二二〇、〇〇〇
獨逸	一八、九〇〇、〇〇〇	三一五、〇〇〇
歐露	四六、五〇〇、〇〇〇	七七五、〇〇〇
伊太利	九、〇五〇、〇〇〇	一五一、五〇〇
墺太利	一〇、一〇〇、〇〇〇	一九〇、〇〇〇
西班牙	六、四〇〇、〇〇〇	一〇七、六六六强
瑞典	二、〇〇〇、〇〇〇	三三、三三三强
葡萄牙	一、六〇〇、〇〇〇	二六、六六六强
諸威	六〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇

國名	自一八四一年至一九〇〇年六十年間ノ移住者概數	平均一ヶ年ノ移住者數
合衆王國	七、七一三、七〇〇	一二八、五六二弱
獨逸	四、八五五、六〇〇	八〇、八八八强
歐露	三、四四三、一〇〇	五七、三八五
伊太利	二、九二七、六〇〇	四八、七八八强
墺匈國	一、五一〇、四〇〇	二五、一七三强
西班牙	一、〇三六、五〇〇	一七、四四一强
瑞典	八四二、六〇〇	一四、一二一强
葡萄牙	六四八、一〇〇	一〇、八〇一强
諸威	四四三、〇〇〇	七、三八三强

(1) M. G. Mulhall, The Dictionary of Statistics (4th ed.), p. 442.
A. D. Webb, The Dictionary of Statistics, p. 235.

和蘭	二、〇〇〇、〇〇〇	三五、三三三強	四、二五〇
丁抹	九〇〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	二、三六六強
白耳義	二、五〇〇、〇〇〇	三六、三三三強	一、七八八強
瑞西	一、〇〇〇、〇〇〇	一六、六六六強	一、六六五

更ニまるほーろハ移住ノ人口ニ及ボス影響ニ關シテ別ニ左ノ興味アル統計的調査ヲ示セリ。(1)

國名	年度	人口一萬ニ對スル增加數	移住ニ因リ人口ノ減少數	差引增加シタル人口數
合衆王國	一八七一—一八八〇年	一三一	二三	一〇八
獨逸	一八八一—一八八五年	一二五	四一	八四
伊太利	一八七一—一八八一年	七三	一八	五五
墺太利	一八七〇—一八八〇年	八七	一七	七〇
西班牙	一八六〇—一八七七年	七五	四一	三四
瑞典	一八七一—一八八〇年	一二九	三二	八七

國名	年度	人口一萬ニ對スル增加數	移住ニ因リ人口ノ減少數	差引增加シタル人口數
葡萄牙	一八六四—一八七七年	七五	一四	六〇
諾威	一八六五—一八七五年	一三三	四三	八〇
和蘭	一八七一—一八八〇年	一一九	一三	一〇六
丁抹	一八七一—一八八〇年	一一九	二八	九三
白耳義	一八七一—一八八〇年	九六	一九	七七
瑞西	一八七一—一八八〇年	七五	一三	六二

（註二）獨逸ニ於ケル人口ノ密度ト移住者ノ數トノ關係ヲ表示セバ左ノ如シ。(2)

聯邦	一基米ニ付人口ノ密度	人口十萬人ニ付移住者ノ數
ぽーぜん	七二・四	三〇
しゅれすうぃっぐほるしゅたいん	八五・二	六
はのーばー	七六・四	三三
うるすとぶろいせん	六六・七	一七
ぽんめるん	四四・〇	一四

聯邦	一基米ニ付人口ノ密度	人口十萬人ニ付移住者ノ數
しゅれぢゑん	一二九・六	五
へすせんなすさう	一四一・四	八
らいんらんど	二六二・七	九
ざくせん	一二二・二	一三
うるすとぶあーれん	一〇四・〇	一四

(1) Mulhall, Dictionary of Statistics, p. 443.
(2) Statistisches Jahrbuch für das Deutsche Reich, 1915. ニ據ル、

加之、假リニ海外移住ノ奬勵ニ依リテ一時人口ヲ調節シ得タリトスルモ、之ニ因リテ生ズル國內住民ノ生活上ノ餘裕ハ、久シカラズシテ又人口ヲ舊ニ復セシムベキハ想像スルニ難カラザルヲ以テ、斷エズ多數ノ國民ヲ移住セシメ得ベキ見込存ゼザル限リハ、斯カル人口ノ調節策ハ多大ノ價値ヲ有スルモノニ非ズ、然カモ斷エズ國民ノ移住ヲ奬勵セント欲セバ、前述ノ如ク常ニ國內ニ於ケル少壯有爲ノ勞力ヲ失フノ危險アルコトヲ覺悟セザル可カラズ、從來國民ノ海外發展ヲ人口調節ノ有力ナル一手段ト思考セル論者等ハ、移出セラルベキ勞力ノ性質及之ガ人口調節上ニ及ボス實際上ノ效果ヲ各種ノ方面ヨリ攻究シテ然ル後之ヲ奬勵スルニ非ズシテ、極メテ單純ナル理論上ノ見地ヨリ之ヲ力說セントスルニ過ギズ、是レ其ノ所說ト實際トノ間ニ著シキ差異ヲ生ズル所以ニシテ、めーよー、すみすガ嘗テ其ノ著『移住論』中ニ "Emigration does not bring about a decrease of population; neither does it relieve congestion of population, nor remove the burden of poverty and low-living which has deen caused by an excess of population."[1] ト言ヘルハ寧ロ吾人ト其ノ見ヲ同フセルモノアリ、假令海外移住ヲ奬勵スルモ其ノ人口調節上ニ及ボス效果ハ左マデ大ナルモノニ非ザルコト以上述セル所ノ如シトセバ、社會政策上ノ見地ヨリセル海外發展論ノ實際上ノ價値ノ如キモ亦推シテ知ル可キノミ、然レドモ斯ク言ヘバトテ吾人ハ決シテ國民ノ海外移住ヲ輕視セントスル者ニ非ズ、唯從來一般ニ妄信セラレタルガ如クニ之ヲ以テ過剩ナル一國ノ人口ヲ調

(1) Mayo-Smith, Emigration and Immigration, p. 26.

節シ、現今ノ社會ニ於ケル諸種ノ病的現象ヲ救濟シ得ルガ如クニ速斷スルノ謬レルコトヲ指摘セントスルニ過ギザルナリ。

（註）海外移住ノ奬勵ヲ以テ一國ノ人口ノ過剩ヲ調節シ得ルガ如クニ思考スルノ誤レルコトハ既ニ述ベタル所ノ如シト雖トモ、唯人口多キガ爲メニ有爲ノ材ヲ抱クモ國内ニ在リテハ適當ノ業ヲ得ズシテ、徒ラニ不平不滿ノ念ヲ增長セシムルニ過ギザルガ如キ場合ニハ、此ノ如キ國民ノ海外移住ノ途ヲ開クコトハ固ヨリ吾人ノ所論ト相容レザルモノニ非ズ、何トナレバ斯カル場合ニハ直接其ノ國ニ何等ノ損害ヲ與フルコトナキノミナラズ、移住者自己ニトリテモ却テ幸福ヲ齎ラスベキガ故ニ毫モ之ヲ非難スベキ理由存セザルヲ以テナリ、然レドモ海外移住ノ奬勵ヲ以テ領土的膨脹主義若クバ侵略主義ノ實行ノ一手段ニ供セントスルガ如キハ非ナリ、此ノ如キ政策ハ世界ノ各地ニ未ダ無主地ノ殘存セル時代ニ在リテハ兎ニ角、現今ノ如クニ各國其ノ領域ヲ劃定シテ妄リニ他國ノ權力ノ侵入ヲ許サザル時代ニ於テハ到底其ノ成功ヲ期シ得ベキニ非ザルナリ、其ノ他海外移住ノ奬勵ヲ以テ對外貿易促進ノ重大ナル一原因ノ如クニ看做シ、或ハ移住者ニ依リテ本國ニ送付セラルベキ金額ハ國富ノ增加ニ寄與スル所大ナルガ如クニ誇張スル論者ナキニ非ズト雖トモ、吾人ハ其ノ效果ヲ全然無視スルノ誤レルト共ニ又之ヲ過大視スルノ誤レルコトヲ信ズル者也。

既ニ一言セルガ如ク假令一國ノ人口ノ增加率ハ大ナリトスルモ、國内ニ於ケル產業的活動ノ餘地尙ホ尠ナカラザルカ若クバ未開ノ富源ノ殘存セル場合ニハ、國外移住ノ奬勵ニ先ダチ國内ノ產業ヲ一層旺盛ナラシムルコトニ依リテ增加セル人口ノ收容力ヲ大ナラシムルト共ニ、又能フ限リ其ノ生產物ヲ外ニ移出セシメンコトニ全力ヲ傾注スルヲ以テ寧ロ急務トナス、國内ニ於ケル產業的ノ活動及富源ノ開發ニシテ遺憾ナキ程度ニ達スル時ハ、恰モ充實セル水槽ノ自ラ外ニ溢出スル

ガ如ク、國民ノ海外移住ノ如キハ特ニ奬勵ヲ加フルコトナキモ自ラ其ノ途ヲ開クニ至ルベキヤ必セリ。

(三)

顧テ之ヲ我ガ國ノ實況ニ就キテ考フルニ、農業上ニ於テモ工業上ニ於テモ將又商業上ニ於テモ我ガ現時ノ產業狀態ハ果シテ先進諸國ニ比シテ毫モ遜色ナキ程度ニ迄進步發展ヲ遂ゲツツアリヤ、農業ハ實ニ我ガ國民的產業トシテ二千有餘年ノ歷史ヲ有シ、一見其ノ發達ノ頂點ニ達シツツアルガ如キ觀アルモ、尙ホ仔細ニ之ガ經營ノ實況ヲ考察シ來ル時ハ、土地ノ整理・種子肥料等ノ改良・農業勞力ノ有利ナル使用・金融機關ノ整備・農民ノ敎育及各種ノ協同組織ノ奬勵等ニ依リテ、農業的生產ヲ現在ヨリモ更ニ增加セシムベキ餘地決シテ少ナシトセズ、凡ソ農業的生產ノ增加ハ既墾地ノ利用ヲ一層集約的ナラシムルヲ以テ第一義トナスモ、集約的ノ農業經營ニ關シテハ過小農民國タル我ガ國ノ如キハ、殆ンド遺憾ナキ程度ニ達シツツアリト謂フモ敢テ不可ナク、從來我ガ農業ヲ目シテ既ニ發達ノ頂點ニ達シタリトナス論者等ハ、單ニ此ノ點ノミニ着眼シテ其ノ將來ヲ斷ゼントスルモノノ如シト雖ドモ、農業的生產ノ增加ハ更ニ(一)現在ノ未耕地・荒蕪地又ハ水底地等ヲ化シテ農耕地ト成スコト、(註)(二)種子ノ改良肥料ノ選擇其ノ他一般栽培技術ニ注意スルコト、(三)副業ノ奬勵及農業勞力ノ一層有利ナル使用方法ヲ講究スルコト、(四)農業金融ノ便ヲ計ルコ

トニ依リテ農民ノ生産的活動ヲ敏活ナラシムルコト、(五)學理ト經驗トヲ基礎トセル適切ナル實用的ノ農業教育ヲ農民間ニ普及セシムルコト、(六)各種ノ組合又ハ團體ヲ組織シテ斷エズ農事ノ改良及農業的生産ノ增加ニ協力セシムルコト等ニ負フ所甚ダ大ニシテ、是等ノ點ニ關シテハ我ガ農業ノ現狀及農民ノ實況ハ未ダ頗ル幼稚ノ域ニ在リト言ハザル可カラズ、故ニ現在ノ狀態ヲ以テ我ガ農業ハ既ニ發達ノ眞頂ニ達シタルガ如クニ思考スルハ誤レリ。

（註）我ガ國ノ農耕地ノ面積ハ大正三年度ニ於テ四二百九十六萬一千町歩餘・畑二百九十一萬六千町歩餘・合計五百八十七萬八千町歩餘ニシテ、國土ノ總面積三千八百九十一萬七千町歩餘ノ約一割五分ニ相當スルモ、尙ホ此他ニ原野即チ未耕地又ハ荒蕪地トシテ殘存セルモノ百三十二萬七千町歩餘アリ、然ルニ近年是等ノ未耕地又ハ荒蕪地ノ地目ノ變換・湖海池沼等ノ埋立干拓等ノ結果トシテ農耕地ハ逐年增加シ、明治三十八年ヨリ大正三年ニ至ル十箇年間ニ就キテ觀察スルモ、田ニ於テハ平均毎年一萬三千町歩餘・畑ニ於テハ四萬一千町歩餘・合計五萬五千町歩餘ヲ增加シツツアリ、從テ農業的ノ生産モ亦之ニ比例シテ增加シツツアルコトハ言ヲ俟タズ。(1)

今ヨリ殆ンド二十年前獨逸ノ農政學者ビるつハ『一國ノ農業的生産物ハ國民ノ需要ニ應ズルニ充分ナラザル可カラズ、若シ然ラザル時ハ他國ニ依賴スルノ必要ヲ生ズルニ至ルモ、此ノ如キハ大ニ愼ムベキコトタリ、假リニ獨逸ガ露・佛・英等ト戰端ヲ開クガ如キコトアリトセバ、獨逸ノ農業ノ現狀ヲ以テシテハ國民ハ食料問題ノ爲メニ早晩苦シムノ日アルベキヤ必セリ、蓋シ獨逸ノ農業的生産物ハ國民ノ需要ヲ充タスニ足ラズシテ、穀類ノ約七分ノ一ハ輸入ニ仰ギツツアルヲ以テナリ、斯カル輸入ハ全ク之ヲ防壓スルカ少クトモ最少限度ニ止メザル可カラズ、而シテ此目的

(1) 大正六年農商務省農務局刊「本邦農業要覽」一乃至二頁、

ヲ達セントセバ、土地ノ利用ヲ一層集約的ナラシムルコト及現在ノ未耕地ヲ化シテ農耕地タラシムルコトニ注意スルニ在リ』ト言ヘリ、[1] 這ハ啻ニ二十年後ノ今日ニ至リテ獨逸國民ニ痛切ニ其ノ眞理ヲ覺認セシメタルノミナラズ、嘗テ國際分業ノ主義ヲ以テ國是トナシ、農業ノ如キハ殆ンド顧ミザリシ英國ニ於テスラ、今次ノ大戰ハ明カニ國內ニ於ケル農業的生產ノ增加ヲ計ルノ必要アルコトヲ感知セシメ、農業振興策ハ今ヤ有力ナル輿論ヲ形造ラントシツツアリ、[2]

(註) 英國ニ於テハ國民ノ生活ノ主糧タル小麥及小麥粉ノミニ就キテ觀察スルモ、國內ノ產額ハ之ヲ價格ニ見積ル時ハ全消費額ノ約六分ノ一、數量上ヨリセバ約五分ノ一ニ過ギズ、而シテ殘リ五分ノ四ハ之ヲ輸入ニ仰ギツツアルモ、其ノ內約二分ノ一ハ自國ノ植民地卽チ印度・加奈太及濠洲等ヨリ輸入シツツアリ。[3]

幸ニシテ我ガ國ニ於ケル穀類ノ生產額ハ國民ノ主糧タル米麥二種ニ就キテ觀察スルモ、近年品種ノ改良・施肥ノ增加其ノ他一般栽培技術ノ進步ニ伴ヒ產額次第ニ增加シ、最近五箇年間(自明治四十四年至大正四年)ノ平均產額ヲ過去(自明治三十四年至同三十八年五箇年間)ニ比較スル時ハ、米ハ栽培面積ニ於テハ五分ヲ增加シタルニ拘ハラズ其ノ產額ハ二割餘ヲ、又麥類ハ栽培面積ニ於テハ約四厘ヲ減ジタルモ其ノ產額ハ約二割六分ヲ增加シ、[1] 此ノ如クシテ全需要額ニ對シテハ尙ホ多少ノ不足ナキニ非ザルモ然カモ辛フジテ國內ノ消費ヲ充タシ得ルノ狀態ニ在リ。(註)

(註) 自明治四十三年至大正三年五箇年間ノ我ガ國ノ米ノ消費額ハ平均五千三百二十七萬石餘、麥類ノ消費額ハ平均二千三百〇六萬石餘ナルモ、自明治四十四年至大正四年五箇年間ニ米ノ生產額ハ平均五千三百〇二萬石餘、麥類ノ生產額ハ平均二千

(1) F. v. Goltz, Agrarwesen und Agrarpolitik, S. 11-15.
(2) A. D. Hall, Agriculture after the War, pp. 127-131.
H. Gibson, The New Agriculture. (An article in "United Empire," May,1917.)
R. H. Rew, Food Supplies in War Time (in Oxford Pamphlets Series X.)
(3) Hall, Agriculture after the War, p. 9.

二百九十六萬石餘ナルヲ以テ、米ノ不足額ハ一箇年約二三十萬石、麥類ノ不足額ハ十萬石内外ニ過ギズ。(1)

更ニ米麥類ノ生産增加ノ割合ト人口增加ノ割合トヲ比較スルモ、少クトモ最近二十年間ノ傾向ハ我ガ國ニ於テハまるさすヲシテ其ノ名ヲ成サシメタル人口論ノ論據ヲ是認セシムルニ足ルベキ有力ナル材料ヲ發見スルコト能ハズ、否却テ之ト反對ニ人口增加率ヨリモ食料增加率ノ寧ロ大ナラントスルガ如キ傾ヤサヘアリ、（別表參照）固ヨリ斯カル現象ノ將來永久ニ持續スベキ乎ハ頗ル疑問ニシテ、若シ人口ノ增加ニ對スル自然的又ハ人爲的ノ制限存セズトセバ、地積ノ有限性ノ結果トシテ終ニハ著シク食料ノ不足ヲ感ズルニ至ルノ時機ナシトセズト雖ドモ、少クトモ現今ニ於テハ未ダ斯カル傾向ヲ認メ得ベカラザルヨリ考フルモ、我ガ國民ノ産業的活動中最モ古キ歷史ヲ有セル農業ニ於テスラ、尙ホ其ノ發達ニ餘力ノ存スルコトヲ推知セシムルニ難カラザルナリ。(2)

（別表）

米麥ノ收獲增加率ト人口ノ增加率トノ比較

年度	米ノ收獲高	比率	麥ノ收獲高	比率	人口	比率
自明治二十年至同二十四年五箇年間平均	六、七四二、七四一石	100	一五、〇四〇、二六〇石	100	五、六四一、二一九	100
自明治二十五年至同二十九年同上	六、九〇三、八〇一	一〇二	一六、四四七、四〇五	一一六	五、八二一、四〇六	一〇五
自明治三十年至同三十四年同上	七、一〇一、二一五	一〇六	一六、四三二、〇一六	一一四	五五、八四一、四一〇	一一二
自明治三十五年至同三十九年同上	七、四二一、八一五	一一四	一八、一四二、八一〇	一二一	四四、一四一、六六四	一一八

(1) 大正四年農商務省農務局刊『米ニ關スル調査』日本ノ部一四一頁、
同上『麥其他雜穀ニ關スル調査』一九二頁、
(2) 農學博士古在由直氏『五十年後ノ農業』（帝國農會報第七卷第七號）參照、

自明治四十年至同四十四年	同上	五〇、三五〇、三七六	一三一	二一、五六八、八五六	一四三	四九、九四四、八四〇	一三五
大正元年		五〇、三七二、一四三	一三〇	三二、八四〇、三二一	一五三	五一、四四八、八〇〇	一二九

備考　米・麥ノ收穫高ハ農商務統計ニ據リ、人口ハ統計年鑑乙種現住人口ニ據ル、比率ハ何レモ自明治二十年至同二十四年五箇年間ノ平均ヲ一〇〇トシテ算出ス。

(四)

次ニ工業ニ關シテハ更ニ其ノ發達ノ幼稚ナルモノアリ、凡ソ一國ノ工業ノ發展ヲ期セントスルトキハ一方ニ於テハ最新鋭利ナル器具機械ヲ使用シテ直接消費ノ用ニ供セラルベキ貨物ノ生産ニ從事スルト共ニ、他方ニ於テハ又是等ノ器具機械ヲ發明・改良・製造・工作スル等ノ設備完全ニ行ハレザル可カラズ、換言セバ消費財工業(若クハ機械使用工業)ト共ニ資本財工業(若クハ機械製作工業)ノ併行進歩ヲ期セザル可カラズ、彼ノ英・獨・米等ノ諸國ガ世界的市場ニ於テ工業上ニ雄飛シツツアル所以ハ、實ニ是等ノ両者ノ併進ヲ圖リツツアルニ因ル、我ガ國ニ於テハ大規模工業ノ輸入セラレシヨリ以來日尚ホ淺キヲ以テ固ヨリ之ヲ彼レニ比スベカラズト雖ドモ、今次ノ大戰前ニ至ル迄ハ我ガ工業ハ所謂消費財工業ノ時代ヲ脱セズシテ、資本財工業ニ至リテハ殆ンド見ルニ足ルモノナカリシト言フモ不可ナシ、然ルニ今次ノ大戰ハ我ガ資本財工業ノ發達ニ一大刺戟ヲ與ヘ、嘗テ三千萬圓乃至四千萬圓ノ輸入ヲナシツツアリシ各種ノ器具・機械・軌條・船舶・車輛等ノ主要ナル資本財ノミニ就キテ觀ルモ、大正四年度ニハ其ノ輸入額ヲ一千五百萬圓内外ニ減殺スルコトヲ

(1) 大正三年山崎繁次郎編「米界資料」二八一乃至二九頁、

得タリ、[1] 然カモ斯カル資本財ノ輸入ノ減少ハ普通起リ得ルガ如キ國内ニ於ケル産業的活動ノ不振ノ結果ニ基クモノニ非ズシテ、却テ從來他國ニ仰ギツツアリシ資本財ノ一部ヲ今ヤ自國ニ於テ供給スルヲ得ルニ至レルガ爲メナルコトヲ思フ時ハ、我ガ工業上ノ活動ハ啻ニ消費財生産ノ方面ノミナラズ、資本財生産ノ方面ニ於テモ將來開拓ノ餘地尙ホ頗ル多キヲ感ゼズンバ非ズ、唯我ガ國ハ從來英・獨・米等ノ諸國ノ如クニ資本財工業ノ發達ニ最モ必要缺ク可カラザル鐵及石炭ヲ豐カニ産出セザリシ缺點アルモ、（註）晩近帝國領土ノ膨脹及勢力圏内ノ擴張ニ伴ヒ、朝鮮・滿洲及近ク支那内地ニ於テ是等ノ原料ヲ得ルノ途開カレツツアルヲ以テ、我ガ工業上ノ活動モ亦將來ハ單ニ消費財工業ノ方面ニノミ躊躇セズシテ、更ニ進ンデ資本財工業ノ方面ニ發展センコトニ努メザルベカラズ。[2]

（註）一九〇八年乃至一九一〇年ノ三箇年間ニ於ケル世界ノ鐵鑛及石炭ノ平均産額ハ左ノ如シ

鐵

國名	噸數	全産額ニ對スル割合
	百萬噸	
米國	四六・三	三六・五
獨逸	二六・八	二〇・三
英國	一五・二	一二・〇
佛國	一〇・七	八・四
西班牙	九・五	七・五
露國	五・六	四・四

石炭

國名	噸數	全産額ニ對スル割合
	百萬噸	
米國	四五・四	三七・五
英國	三九・八	三四・一
獨逸	二四・七	一九・六
墺匈國	一四・五	一二・〇
佛國	四・〇	三・四
露國	三・七	二・七

（1）日本帝國第三十乃至三十五統計年鑑參照、
（2）J. R. Smith, Industrial and Commercial Geography, pp. 357, 383.

其他ノ諸國	一三、八	一〇・九	白耳義	二五、八	二・一
計	一二六、九	一〇〇・〇	日本	一六、四	一・五
			其他ノ諸國	六五、四	五・四
			計	一二五、五七	一〇〇・〇

（同年度内ニ於ケル我ガ國ノ鐵ノ平均年産額ハ五萬五千噸餘ニシテ其ノ後次第ニ增加シ大正四年度ニハ八萬二千噸餘ニ達シタリ（第三十二次農商務統計表））

然レドモ茲ニ注意スベキハ資本財工業ノ發達ニ關シテハ更ニ他ノ困難ノ其ノ途ニ横タハレルモノアルヲ以テ、之ガ生産ヲ盛ナラシメント欲セバ須ラク此ノ困難ノ除去ニ努ムルヲ以テ急務トナス。之ヲ一切ノ工業ノ發達ノ徑路ニ就キテ觀察スルニ、凡ソ如何ナル種類ノ工業ト雖ドモ其ノ發達ノ當初ヨリ完全ナル生産品ヲ作出スルコトハ頗ル困難ニシテ、這ハ消費財ノ生産タルト資本財ノ生産タルトヲ問ハザルナリ、然ルニ消費財ノ生産ニ於テハ最初ハ其ノ品質多少劣ル所アルモ、若シ其ノ價格ニシテ低廉ナランカ之ヲ處分スルコト必ズシモ困難ナラズ、又國内ニ於ケル斯カル幼稚ナル工業ヲ發達セシメンガ爲メニ他國ノ競爭品ニ對シテ保護的關税ヲ課シ、以テ國内ノ生産者ヲ保護スルノ途無キニ非ズ、然レドモ資本財ノ場合ニ在リテハ假令其ノ價格ハ低廉ナルモ品質ノ劣レルモノハ斷エズ修繕其ノ他ノ失費ヲ要スルコト大ナルガ故ニ、思慮アル企業者ハ價格ノ如何ニ拘ハラズ品質ノ優良ナルモノヲ購ハントスルニ至ルハ免ル能ハザル所タリ、既ニ然リトセバ資本財ノ場合ニハ優良ナル競爭品ノ存スル時ハ、品質ノ劣レル物ハ市場ニ併立スルコト能ハザルノ結果ヲ生ズベシ、然カモ此ノ場合ニ國内ニ於ケル幼稚ナル資本財工業ノ發達ヲ保護センガ爲メ

ニ他國ノ優良品ニ課稅スルガ如キハ、却テ是等ノ資本財ヲ使用シテ消費財ノ生產ニ從事セントスル多數ノ企業者及一般消費者ニ不利ヲ與フルモノナルガ故ニ、漫リニ斯カル方法ニ依賴スベキニ非ズ、加之、更ニ資本財ノ生產ハ消費財ノ生產ヨリモ概シテ長日月ヲ要シ、同一行爲ヲ反覆修錬スルノ機會多カラズ、從テ生產技術上ノ熟錬ヲ得ルコトモ亦容易ナラザルノ差アリ、是等ノ事情ハ實ニ資本財工業ノ消費財工業ヨリモ發達ヲ困難ナラシムル所ノモノタリ、故ニ之ニ對スル方策トシテハ一面ニ於テハ工業教育ノ力ニ依リテ優良ナル資本財ノ生產ニ關スル智識ノ普及ヲ計ルト共ニ、他面ニ於テハ少クトモ之ガ實驗時代ハ國家自ラ其ノ資ヲ投ジテ模範的ノ工場ヲ起シ、精巧ナル資本財ノ生產ニ缺ク可カラザル實際上ノ技術ヲ修得セシムルノ機會ヲ與フルコトニ注意セザル可カラズト信ズ。

此ノ如クシテ資本財工業ノ方面ニ一新紀元ヲ開クニ至ル時ハ、其ノ自然ノ結果トシテ消費財工業モ亦現今ヨリモ更ニ一層ノ活躍ヲ呈スルニ至ルベシ、蓋シ是等ノ兩者ハ恰モ双輪ノ如ク互ニ相依リ相輔ケテ一國ノ工業的發展ヲ完成セシムベキ特質ヲ有スルヲ以テナリ、果シテ然リトセバ之ヲ工業上ヨリ觀察スルモ、我ガ國民ノ將來ノ活動ノ餘地ハ尙ホ頗ル大ナリト言ハザル可カラズ。

（五）

以上要論セルガ如ク既ニ農業上ニ於テモ亦工業上ニ於テモ我ガ國民ノ活動ノ餘地尙ホ頗ル大ナ

リトセバ、商業上ノ活動ノ餘地ノ如キハ更ニ絮說ヲ須ヰズシテ自ラ明カナルベシ、蓋シ一國ノ商業ノ消長ハ其ノ國ニ於ケル農工二業ノ消長ニ依リテ左右セラレ、是等ノ二業ニシテ盛ナランカ商業モ亦自ラ活氣ヲ呈ス可キモ、然ラザル場合ニハ反對ノ現象ヲ示ス可キヲ以テナリ、故ニ我カ商業ノ健實ナル發達ヲ期セント欲セバ先ヅ其ノ根本ニ溯リテ農工二業ノ培養ニ努メザル可カラズ、斯カル觀點ヨリセバ國內ニ工業的發展ノ要素ヲ缺クガ故ニ止ムナク農業的ノ生產ニ全力ヲ傾注シツツアル和蘭及國內ノ農業ヲ荒廢ニ歸セシムルモ尙ホ工業的ノ生產ニノミ沒頭シテ顧ミザリシ過去ノ英國ノ如キハ、未ダ以テ我カ國民ノ範トナスニ足ラザルナリ、基礎アリ根抵アル商業的ノ發展ハ必ラズヤ農工二業ノ保調的發達ニ立脚セザル可カラズ、這ハ平時ニ在リテハ比較的閑却セラレツツアル問題ナルモ、今次ノ大戰ノ如ク一朝有事ノ日ニハ痛切ニ其ノ然ル所以ヲ感ズルニ至ルベシ。唯國內ニ於ケル產業的活動ノ成果卽チ其ノ生產物ヲ廣ク國外ニ輸出シテ、所謂經濟的ニ我カ國民ノ海外發展策ヲ講ゼント欲セバ、(一)貨物ノ生產者・媒介者及國外ニ於ケル需要者間ノ關係ヲ一層密接ナラシメ斷エズ相互ノ聯絡ヲ保タシメンコトニ努メザル可カラザルコト、(二)生產者及媒介者互ニ協力シテ無益ナル競爭ヲ避ケ品質ノ統一ヲ計ルト共ニ嚴ニ詐僞的取引ヲ戒ムベキコト、(三)契約事項ノ確守及背信行爲ノ根絕ヲ期セザル可カラザルコト、(四)輸出貨物ニ對スル檢查ヲ勵行シ啻ニ貨物ノ品質ノミナラズ封裝等ニ關シテモ嚴密ナル監督ヲ爲スベキコト、(五)小規模工業

ニ對シテハ其ノ生産及販賣ニ組合組織ヲ普及セシメ可及的基礎ノ安固ヲ計ル可キコト等ニ特ニ注意ヲ加ヘザル可カラザルハ言ヲ俟タズ、如何ニ其ノ根本ヲ培養スルモ若シ是等ノ諸點ニ於テ從來ノ如クニ缺グル所多カランヽ、我ガ國民ノ海外ニ於ケル經濟的發展ノ如キハ遂ニ永久其ノ目的ヲ達スルノ機ナカルベシ。

我ガ國ノ如キハ幸ニシテ各種ノ産業的ノ活動ニ缺グ可カラザル勞力ノ豐富ナルモノアリ、加フルニ農工二業ニ於ケル將來ノ發展ノ餘地ノ尙ホ尠ナカラザルコトモ亦既ニ述ベタル所ノ如シトセバ、是等ノ勞力ヲ國内産業ノ更ニ周到ナル開發ニ利用シ、農工業上ニ於テハ勿論商業上ニ於テモ基礎アリ根抵アル健實ナル發展ヲ遂ゲシムルコトハ寧ロ最先ノ急務ト言ハザル可カラズ、此ノ如クシテ國内産業ノ遺憾ナキ開發ヲ成就スルニ至ル時ハ、内ニ在リテハ現在ヨリモ更ニ多クノ人口ヲ支持スルコトヲ得ベク、又外ニ對シテハ所謂經濟的ニ海外發展ノ目的ヲ達スルコトヲ得ベシ、内ニ産業的活動ノ餘地尙ホ乏シカラザルニ拘ハラズ徒ラニ國民ノ移住的發展ノミヲ奬勵シテ、其ノ經濟的發展ノ對内的及對外的ノ諸種ノ關係ニ於テ更ニ之ヨリモ重大ナル意義ヲ有セルモノアルコトヲ忘却スルガ如キハ非ナリ。

我ガ國民ノ經濟的ノ海外發展ノ必要ヲ提唱スルニ當リ最後ニ尙ホ一ノ注意スベキ事項ハ、假令過去ニ於テハ自ラ豐富ナル資本ヲ有セザリシヲ以テ、歐米諸國ノ如クニ有望ナル海外ノ事業ニ資

本ヲ投ジテ所謂放資的ノ發展ヲ爲サントスルモ能ハザル事情アリシト雖ドモ、輓近國內產業ノ勃興及之ニ伴フ資本ノ增加ハ、國外ノ有望ナル事業ニ對シテ資本ヲ放下シ得ベキ餘裕ヲ生ゼシムルニ至レルヲ以テ、將來ノ我ガ國民ノ經濟的ノ海外發展ハ又此ノ方面ニ特ニ意ヲ用ユルノ必要アルコト是レナリ。第十八世紀ノ末年以後ニ實現セラレタル產業上ノ一大革命ハ英國ヲシテ他國ニ率先シテ世界ニ於ケル工業國タル地位ヲ獲得セシメ、啻ニ工業上ノ覇權ヲ掌握セシメタルノミナラズ其ノ生產物ヲ海外各地ニ輸出シテ通商上ニ於テモ亦優越的ノ地位ヲ占メシムルニ至リシガ、其ノ後各國ハ銳意國內產業ノ發達ヲ計リ可及的自給ノ策ヲ講ズルニ至レルヨリ、英國ノ資本家等ハ自ラ貨物ヲ生產シテ之ヲ輸出スルニ代ヘ、餘リアル資本ヲ海外ノ事業ニ投ジテ新タニ放資的ノ發展ヲ試ムルニ至リシガ、此ノ方法ハ却テ效ヲ奏シ嘗テ世界ニ於ケル工業國タリシ英國ハ今ヤ再躍シテ世界ニ於ケル資本國タルノ地位ヲ獲得スルニ至レリ、然ルニ獨・佛・米等ノ諸國モ最初ハ英國ノ資本ヲ利用シテ國內產業ノ開發ヲ計リシガ、漸次國力ノ充實スルニ從ヒ英國ニ倣ヒテ又其ノ餘リアル資本ヲ國外ノ事業ニ放下セントスルノ傾向ヲ生ジ、此ノ如クニシテ遂ニ現今ノ放資的海外發展ノ時代ヲ現出セシムルニ至レリ、東洋及南洋方面ニ對スル我ガ國ノ經濟的ノ發展モ亦單ニ通商貿易ノ進捗ヲ計ルノミヲ以テ滿足スベキニ非ズシテ、更ニ放資的發展ノ程度ニ迄進マシメザル可カラズ、殊ニ我ガ生產物ノ最大輸出國ノ一タル支那ハ將來或種ノ工業品ニ關シテハ自給的ノ地

位ニ達シ得ベキヲ以テ、我ガ經濟的ノ發展策ヲ單ニ貨物ノ輸出入ノ增加ニノミ求メントスルガ如キハ誤レリ、宜シク一面ニ於テハ通商貿易ノ發展ヲ計ルト共ニ又他面ニ於テハ有望ナル事業ニ對シテハ放資的ノ發展ヲ爲スノ覺悟ナカルベカラズ、同一ノ理由ハ又南洋方面ニ對シテモ之ヲ適用スルコトヲ得ベシ、何トナレバ熱帶植物ノ利用ハ現今ノ文明的生活ニ於テハ一日モ缺ク可カラザル所ノモノニシテ、歐米諸國ノ夙ニ南洋方面ニ着眼セル所以ハ土地其ノモノヨリモ此處ニ成育繁茂セル熱帶植物ノ價値ヲ頗ル重大視シタルニ因ル、而シテ是等ノ有用植物（例ヘバ護謨・椰子・甘蔗・珈琲・麻等）ノ主タル產地ハ地理上ノ關係ヨリ論ズルモ我ガ國民ノ放資的活躍ニ幾多ノ利便ヲ與フルヲ以テナリ。

要之、國民ノ海外發展問題ハ社會的及經濟的ノ二方面ヨリ之ヲ解決セザル可カラザルコトハ固ヨリ論ヲ俟タズト雖ドモ、其ノ孰レニ重キヲ置クベキカハ國內ニ於ケル產業的活動ノ餘地及未開ノ富源ノ有無ニ依リテ決セラルベキ問題ニシテ、我ガ國ノ如キハ寧ロ國民ノ移住的發展ヲ奬勵スルニ先ダチ、內外ニ對スル經濟的發展ノ充實ヲ計ルヲ以テ急務ナリト信ズ。